

---

# 相棒探偵～2人の高校生～

クリ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

相棒探偵〜2人の高校生〜

### 【Nコード】

N9948E

### 【作者名】

クリ

### 【あらすじ】

中学生からの仲である高校生2人が難事件に挑む！

## 第一章 第一話 海水浴殺人事件

「夏だ！海だ！！水着だ～～～！！！！」

「いきなり何だよ。しかも水着って……」

「別にいいだろ？将幸君？」

「いや、普通に気持ち悪いから続弘。あとさあ、突然君付けするなよ。」

「え～～いいじゃん。俺達親友だろ？」

「はあ～～……。」

僕の名前は真田将幸「さなだまさゆき」。そして、隣にいるうるさい奴は直江続弘「なおえつぐひろ」。

いたって普通の高校に通っている2年でこいつとは、中学校からの仲だ。んで、今日は一夏の思い出に2人で海にやってきた。

でも、まさかあのようなことがおきるとは夢にも思わなかった。

「うはあく。やっぱ海はいいね～～。水着の女の子がいっぱい！そんなことを言っている続弘をよそに、将幸は呆れ顔で砂浜を歩いていた。すると、続弘が将幸の顔をのぞきこむようにして出てきた。

「今度は何だよ？」

「なあ、女の子の胸の大きさ当てゲームやるうぜー！」

「はあ？」

「それでさ、負けたほうは今日の昼飯おごるってことで。」

「でもどうやって大きさを確認するんだよ？」

「簡単だろ！聞きゃあいんだよ！聞きゃあ！……」

「いや、キモいって言われて終わると思うけど……。」

「それもそうだなあ……。」 続弘が下を向いて歩いて行くと、頭に何か柔らかな感触がした。

「あ、すいません。」

続弘が謝ると、

「あれ？もしかして続弘!？」

「へ?」

「やっぱりそうだ。あれ？将幸君も一緒なの?」

「ま、まさか…輝美!!」

どこかで聞き覚えがある声だと思ったら、その声の主は続弘の幼なじみの上杉輝美「うえすぎてるみ」だった。

「どうしてここにいるんだよ!」

続弘が動揺を隠せずにいると、輝美が怒りながら言った。

「どうして…じゃないわよ!! たくさんメールしたのに無視なんかするからよ。だからあんたのお母さんに話しを聞いて、ここまでやってきたんだから!!」

輝美はマシンガンのように、さらに言葉を続ける。

「しかも何?人の胸にぶつかっちゃってさあ? すいませんじゃないし。最悪だし。」

「……なあ、俺もう帰っていいか?」

続弘が涙目で将幸に訴えた。

「はは、そついや晴佳も何でいるんだよ。」

続弘の訴えに、苦笑いで答えた将幸は、輝美の裏に隠れている女子高生に話しかけた。

「え?わ、私は輝美がどうしても行くこうつて言うから……」

「嘘つけ!将幸君に会えるってわかってはしゃいでいたじゃない!」

「そ、それは……。」

「まあいいや。せつかく来たんだしここで立ち話してるのもなんだから、海の家に行こうぜ。」

「う、うん……。」

「なあ、さっきから何だよ?何か僕の顔についてるのか?」

「そ、そういうわけじゃないけど……。」

このよくわからんもじもじしている奴は、武田晴佳「たけだはるか」。僕の小学生からの幼なじみだ。中学校に入学したころは普通だったのに、卒業するころになってこんなふうになった。本当によくわからない奴だ。

「んじゃ、とつとと海の家に行こっか。」

「ああ。」

こうして4人は、海の家についた。

「……………でね、そいつが……………」

「アハハハハハ！」

4人がいつものように、世間話に夢中になっていると、だんだん外が騒がしくなってきた。

「何か外が騒がしくなってきたね。」「そうだな……………。なあ将幸、ちよつと見てこようぜ。」

「そうだな。」

将幸と続弘は、椅子から立ち上がって外へむかった。

すると、そこには数人の若者達が騒いでいるだけだった。

「なーんだ。ただ騒いでるだけかよ。」

「みたいだな。」

「ん？ちよつとまで！あそこに綺麗なお姉さんが！！」

「はあ……………」

将幸が大きなため息をついていると、続弘が急に走り出した。

「お、おい！どこに行くんだよ！！」

「決まってるだろ！！あのお姉さんに話しかけんだよ！！」

「ち、ちよつと待てつて!…つて聞いてねーし。」

「そこのお姉さーん!!」

続弘が叫ぶと、そこにいた一人の女の人が振り向いた。

「何ですか?」

「あの〜ここで一体なにを?」

「大学の仲間で泳ぎに来ただけよ。」

「そうなんですか。」

その後暫く話していると、突然女の人の仲間と思われる男の人が血相を替えて走ってきた。

「どうしたの?」

「どうしたもこうしたもねーよ!元がヤバイことになってるぞ!!」

「え!?元が!!?今どうなってるの?」

「溺れてるんだよ!!今ライフセイバーを呼んで、みんなで助けるところだから。早く行くぞ!」

「ええ。ごめんね、君たち。それじゃ!」

そういつて2人は行ってしまった。

「なあ、俺達も行こうぜ!!」

「ええ?面倒くさい。」

「いいから行くぞ!!」

「お、おい!!」

続弘は将幸の腕を引っ張った。

2人がつくと、そこには溺れていたらしい男の人の遺体と呆然と立ち尽くしている仲間がいた……。

## 第一章 第二話 海水浴殺人事件

将幸や続弘と被害者の友人達は、目の前で起こった惨劇に呆然としていた。

「……まさかこの人死んでるのか？」

続弘は目の前に横たわっている人に視線を向けながら言った。

「……みたいだな。」

将幸はその問いに答えた。

「と、とにかく…警察と救急車を呼んだので皆さん落ち着いて下さい。」

ライフセイバーが周辺にいる人達に呼び掛けた。

しばらくしてパトカーと救急車がやってきた。

パトカーと救急車はそれぞれ道路の路肩にとめたあと、中から警官や救急隊員が走ってやってきた。  
そのなかでも帽子をかぶって、ひときわ偉そうな刑事が走りながら野次馬に向かって叫んだ。

「皆さん現場から離れて下さい！！それと被害者の知人と事件につ

いて何か知っている人はその場に待機してて下さい！！事情聴取を行います！！」

その刑事は的確な指示で野次馬や将幸達を誘導した。

それから10分後……。

「……で、あなた達が今回の事件の容疑者ですか。」

「ええ、まあそういうことに……。」

ついさつきまで将幸達と話していた女の人が答えた。

「ではこれから事情聴取を始めます。名前と職業、それから被害者との関係を教えて下さい……。っとその前に私の自己紹介をしなければいけませんね。」

その刑事は帽子を脱いで頭を掻きながら言った。

「私は千葉県警の捜査一科に所属している加藤清成「かとうきよなり」と申します。誠に恥ずかしながら警部を務めています。」

加藤警部が丁寧な自己紹介をした瞬間、続弘が目を輝やかせながら、少し興奮気味に質問した。

「捜査一科の加藤ってもしかしてあの「鬼警部」の異名を持つ人ですよね？」

「え？まあ、世間ではそのように言われているみたいですがね……。」

「やっぱり。一度会ってみたかったですよ！」

「そうだったんですか。いやこれまたお恥ずかしい。」

そういつてまた帽子の下にある頭を掻いた。

「なあ、誰なんだ。あの人？」

興奮気味の続弘を少し冷めさせるようなことを言ったのは、隣で不思議そうに見ていた将幸だった。

「何い〜!? 彼を知らないのか?」

「ああ。」

「やれやれだな。つたく、しょうがない、この俺が教えてやるよ。」

「頼む。」

「加藤警部は犯人の検挙率が一番高い人なんだよ。それで囚人達からついた異名が「鬼警部」ってわけ。そこからメディアをへて全国の国民や警察に伝わったんだ!」

「ふう〜ん。それで?」

「…………いや、それだけ…………。」

「あ、そう。」

将幸は素っ気なく答えた。「おいおい。あ、そうって何なんだよ! ひでえなあ。」

「別にそういうつもりじゃないけどさあ。」

「じゃあどういいうつもりだよ!」

「いや、ただ単に興味があまり無いってだけで…………。」

「何だと!？」

「ゴホン。2人とも言い争いをしている場合ではないだろう。」

2人が喧嘩をしていることに気が付いた加藤警部は咳をして止めるように言った。

「すいません。」

「うむ。ではさっそく事情聴取をしましょう。」

「ちよつと待って下さい。」

事情聴取をしようとした加藤警部に、誰かが話しかけた。

「警部、事情聴取をするまえに現場検証して下さい。すぐそうやって自己紹介したら始めちゃうんですから。」

「ん? 黒田君か。いや〜すまんすまん…………つい癖で。」

「つい癖で。じゃないですよ! いつもそう何ですから。」

「すまんすまん。」

「ったく。」

「あのく、お取り込み中しません。」

続弘が加藤警部と黒田となのる刑事に話しかけた。

「ん？何だね？」

「あなたは誰ですか？」

そう言った瞬間、将幸が続弘の頭を叩いた。

「今度は何！？」

「バカたれ！何失礼なことやってんだよ！」

「あ、すみません。申し遅れました。私は黒田官司」くるだかんじ

「と言います。」

「は、はい。こちらこそすみませんでした。」

黒田が丁重な挨拶をしたから、思わず将幸達もつい謝ってしまった。

「それじゃあ警部、現場に行きましょう。」

「うむ。」

加藤警部と黒田は現場に向かって行った。

しばらくして2人が戻って来た。

「では現場検証も終わったので、今度こそ事情聴取を始めようと思います。」

黒田がそう言うと、加藤警部が事件の内容を話し始めた。

「えく、亡くなられたのは、片桐元「かたぎりはじめ」さん、21歳。大学4年生で、今回はどうやらサークル仲間がこの海にやってきたと。そうですね？」

加藤警部は手帳を見ながら言った。

すると、警部の質問に将幸達と話していた女の人が答えた。

「は、はい。刑事さんの言う通りです。元君とは同じ大学のサークル仲間で……。でもまさかこんなことになるなんて……。」

「ああ。片桐が死ぬなんて……。」「隣にいた同級生らしき男が後に続けて言った。

「では、1人ずつお名前と職業、それから被害者との関係を教えて下さい。」「

加藤警部が持っていた手帳を片手に、ポケットからペンを取り出した。

「えっと、私は柴羽音子」「しばはねねね」といいます。元君と同じ大学の4年で……。あの……。その……。」「

「ん？どうしました？」「

「そ、それで彼とは付き合っていました。」「

「そうでしたか……。分かりました。ありがとうございます。しかし珍しい名前ですね、しばは・ねねねさんですか……。」「

加藤警部がそういうと、柴羽は少しむっとして言った。

「ち、違います！ねねねじゃないです！しばはね・ねねです！」「

「へ？あ、これは失礼しました。ねねねさんじゃなくてねねさんですか。ああはい。ねねねさんじゃなくてねねさんですね？」「

「そうです。」「

「何やってんすか？警部？」「

黒田がニヤニヤしながら加藤警部の肩を叩いた。

「う、うるさい！次いくぞ！次！」「

「あれ？警部顔が赤いですよ？」「

また黒田がニヤニヤしながら言った。

「ええい！いい加減にしろ！」「

2人がそんな調子でやっている最中に、続弘は柴羽を見つめていた。それに気付いた将幸は、続弘の目の前にきて、顔の前で手を揺らした。

「どうした？何かあった？」「

「ああ。わかつたぜ！間違いない！」「

「え？ま、まさか事件がもう分かったのか？」「

「いや。わかったのは事件じゃない。」

「？」

「わかったのは柴羽さんの胸のサイズだあ!!!」

「はあ？」

「どうだ？知りたいだろ？ん？ん？」

「結構だ！つーかまだそんなことやってたのか!？」

「当たり前だ！男のロマンだぞ！」

続弘の言葉に、将幸が思わずため息をついてしまった。

「柴羽さんは間っ違いなくDカップだ！絶対当たってる!」

「もういい。」

あまりにも続弘がひどくて、将幸が呆れてしまった。すると加藤警部が少し怒り口調で言った。

「2人とも！自分たちの世界に入るのは勝手だが、警察の指示には従ってくれよ。」

「え？僕もすか？」

将幸が反抗的に答える。

「そうだ。もつと言うと、もう君たちの番なんだけど。事情聴取…

…。」

「へ？あ、すみません。えっと、僕の名前は真田将幸と言います。

僕はこいつと一緒に海に遊びに来ただけです。」

すると、将幸の言葉に続弘が続けて言った。

「そのこいつってというのが皆さんご存知、この俺、直江続弘です。

俺も将幸と同じ理由でここに来ましたー!」

「……ご存知って…今日君に会うまで知らなかったんだけど……。」

「すんませーん。」

続弘がにこにこしながら謝った。

「あゝ。ところで警部。」

「ん？何だね、将幸君。」「あの人達は被害者とどういう関係なんですか？」

「はあゝ。ちゃんと人の話を聞いてないからだぞ。」

加藤警部がため息ながら言った。

「ごめんなさい。でも気になったので。」

「まったく。柴羽さんのことは聞いてたかい？」

「はい、そのあとです。」

「うむ。じゃあその柴羽さんの左に女性がいるだろ？あれが同じ大学の伊藤博美「いとつひろみ」さん。彼女もサークル仲間だそうだ。」

「じゃあ、その隣の男性は誰何です？」

「ああ、彼は木戸孝之「きどたかゆき」さん。彼もまた、同じ大学のサークル仲間だ。」

「そうですか。ありがとうございます。」

「いやいや。ところで何でこんなことを？」

「一応同じ容疑者どうしなんで、知っておこうかなあと思ひまして。」

「ほお。では事情聴取もとりあえず終わったので、私は現場に戻ります。ですのであなた達は暫く待機してして下さい。」

そついうと、加藤警部は潮風で飛んでしまいそうな帽子を抑えながら、現場に戻って行った。

「ふう。さてと、どうしようかな。」

将幸は加藤警部の後ろ姿を見ながらため息をついた。

「おい！将幸ー！！！」

すると、誰かが自分の名前を呼ぶ声がした。

「何だ、続弘か。」

「何だとは何だ、まったく。それより暫く暇だろ？輝美たちのところで時間潰そうぜ。」

「ああ。それもそうだな。」

将幸たちは輝美たちのもとへ歩き出した。

「ねえ続弘。携帯は見てみた？」

「え？まだだけど。……あ、そつか。輝美は俺の携帯にメールしてたんだっけ。悪い悪い。」

続弘はポケットから携帯を取り出し確認した。

「……………お、おい。冗談はよしてくれよ。」

「どしたの？」

気になった将幸は、隣から携帯の画面を覗いた。すると、そこには受信メールが100件きていた。

「だってなかなか返事くれないんだもん。」

「だからってそりやないだろ。」

続弘は逆に呆れて物も言えなかった。

「そっいえば何かあったの？2人ともなかなか戻って来なかったからさ。」

晴佳が将幸に話しかけた。

「まあな。ちよつと殺人事件があつてな。」

「ホントに？将幸は大丈夫なの？」

「見ての通りだよ。その代わり僕と続弘はどういうわけか容疑者として疑われてるけど…。」

「まあ気にするなつて。俺達は大丈夫だからさ。」

横から続弘が割り込んできた。

「そっいうことだ。じゃ、そろそろ戻るから。」

「う、うん。」

そっいうと将幸達は席をたった。

「なあ、将幸。」

「ん？」

「さっきお前は殺人事件って言ってたけど、もしかしたらただの事故死かもしれないだろ？どうして晴佳ちゃんにそう言ったんだ？」

「ああ、あれは殺人事件でいいと思うよ。ちょっといろいろと気になるところがあるし。」

「じゃあそこまで自信があるなら俺たちもやるか？」

「何を！？」

「決まってるだろ！捜査だよ！！」

「は？無理だろ！」

「大丈夫だって。何とかなるさ。」

「……楽天的だな、お前……。」

「まあな。さ、警部のところに行こうぜ！」

「あ、ああ。」

## 第一章 第三話 海水浴殺人事件

「警部〜！」

「君たちは確か……。」

「そうです。さっきの2人組です！」

続弘が調子良く言った。

「それで何かようかね？」

「えーっと捜査に混ぜてもらえませんか？」

「……はい？ 一体何を言ってるんだ。冗談はよしてくれたまえ。」

「じ、冗談じゃないですよ。僕たちはいたって本気ですよ！」

すると加藤警部はため息まじりに2人を見ながら言った。

「あのな、これは推理ごっこじゃないんだ。実際に人が殺されているんだ。しかも仮に君たちは容疑者なんだぞ？ そんな真似はさせないよ。」

「そこを何とかお願いします……ほら、お前も頼むんだよ！」

「え、あ、警部さんお願いします。」

「断じて駄目だ！」

「もし事件が解けてもそれは警部さんの手柄でいいですから。それと僕たちは協力するだけで、現場とか荒らしたりしませんから。お願いします！」

将幸は頭を下げた。

「う〜ん。……じゃあ今回は特別だぞ。ただし！絶対に勝手なことをしないように……！」

「あ、ありがとうございます……！」

2人は声をそろえてお礼を言った。

「……って言ったものの、どうすんのさ？」

続弘が困った顔で将幸を見つめる。

「そうだなあ。やっぱここは現場検証かなあ。」

「かなあって大丈夫か？お前……。」

「あんまり言うなよ、なんせ初めてなんだから。」

「まあそれもそうだな。じゃあ現場に行こうぜ。」

「ああ。」

こうして2人は現場に向かった。

「ここが事件のあった現場か。」

「まずは何か気になるものがないか探してみるか……って言うてもあるわけないか。もう鑑識が調べちゃったしな。」

続弘が軽くため息をつきながら言った。

「どうする将幸？」

「ん〜、そうだなあ。結局ここに来ても何の手がかりもなさそうだから、僕らであるとき現場にいた人たちに話でも聞いちゃうか。」

「そうか、じゃあさっさと行くか。」

それからしばらくして、2人は容疑者たちがいるところで話をしていたのだった。

「そうですね。ありがとうございます。」  
将幸が礼を言った。

「いや、礼には及ばないよ。…でも君たちも容疑者なんだろう？どうして話を聞いて周ってんだい？」

そう言ったのは容疑者である木戸孝之だった。

「あ…いや、別に好きでやってるだけなんで。」

「ふーん。ま、好きでやってんなら別に構わないけどよ。」

「はあ。…あ、じゃあそろそろ。」

「ああ。まあ頑張りな。」

「ええ。」

こうして2人は木戸と別れた。

「一応話は聞いてみたけどなんか分かったことあるか？将幸？」

「ん…そうだなあ。分かったことつつつか、まずは三人から聞いたことを整理してから考えてみるか。」

将幸はあらかじめ話を記録するためにメモをとっていた。そして、そのメモを取り出し読み上げる。

「えーっと、まずは柴羽さんか。柴羽さんは事件当時僕らと一緒にいたんだよな。」

「ああ。だけどその前はサークル仲間といたんだろ？」

「つまりアリバイはあったってことか……。」

続弘は腕を組んで将幸を見る。

「んで、伊藤博美さんは事件当時何してたんだっけ？」

「確かトイレに行ってたって。」

「ふーん。トイレかあ……。」

「ん？どした？」

メモ帳を見ていた目が続弘に移る。

「いや、トイレで何してたのかなあって。」

続弘がニヤニヤしながら言う。

「は……？」

「トイレでナニしてた。なんつってー。」

続弘がケラケラ笑っていると、将幸が横から軽蔑した視線を送っていた。

「マジないわあ〜。っーかキモイ。」

「そんなこと言うなって！」

「さ、次行くぞー。」

「ひでえな。お前……。」

「くるしゅうない、くるしゅうない。」

将幸は完全にふざけていた。

「おい、待てよ。お前もふざけてんじゃんかよー！」

「木戸孝之さんも事件当時現場にいたんだよな。」

将幸は無視して続ける。

一方で続弘は、隣にいる者を睨みながら拳を握りしめていたのだった。

「……で、これで3人の事件当時の行動が分かったわけだけれども……。」  
「それを聞く限りでは普通に考えて伊藤さんだけがアリバイがないってことになるな。」

続弘が顎に手をあてて言い、将幸もそれに続ける。

「たけどアリバイが無いって言うても別に怪しいことをしてたわけじゃない。」続弘はうなずきながら難しい顔をする。

「なあ、もしかしたら死体の鑑定結果でてるかもしれないから鑑識に聞いてみるか？」

「それもそうだな。じゃあ行くか。」

そう言うとまた2人は歩きだした。

2人は鑑識のところに行った。

「すみません。突然ですけど死体の鑑定結果でしたか？」

「え？まあ出たけど。」「あー教えてくれちゃってもいいですか？」

「その前に君たちは何だね。」

「うっ。えっとお、そのお。」

続弘が動揺していると、

「あ、加藤警部のお使いです。」

将幸が変わりに答えた。

「本当に？」

「ええ。本当ですよ。」

鑑識はまだ2人を疑っていた。

「本当にだな？」

「じゃあ加藤警部に連絡してみてくださいよ。」

「……そこまで言っただけで嘘ってことはないか。」

「じゃあ教えてくれますか？」

「ああ。被害者は溺死、特に外傷も無かったと思っただが……。」

「思っただが？」

2人は鑑識の言葉に耳を傾ける。

「1つだけおかしいところがあったんだ。」

「それって？」

「ああ、被害者の体の一部にミミズ腫れのような傷があったんだ。」

「……！」

2人は目を丸くする。

さらに鑑識は言葉を続ける。

「それでその腫れはクラゲの触手によるものだと思うんだよ。」

「じゃあまさかこれは殺人じゃなくて単なる事故ってことか？」

続弘がっかりしていると将幸が鑑識に質問した。

「他に何かありませんでしたか？」

「他についてその1つしか……。」

すると、鑑識がの途中に顎に手を当てて、遠くを見ながら何か考えていた。

その後思い出したのか、また口を開く。

「そういえばクラゲの傷が……。」

「え？傷に何かあったんですか？」

「ああ。特に参考にはならないと思うが、傷の場所が鎖骨のあたりにあったんだ。」

「……そうですね。ありがとうございます。」

将幸は礼を言い、また歩き出した。

「おい。ちょっと待てよ！」

続弘も鑑識に一礼しその後を追った。

2人はまた砂浜を歩いていた。

「…別に变じゃなくなね？そのクラゲに刺された場所。」  
続弘が将幸の方を向く。

「いや、ちよつとおかしいかもしれない。」

「は？何で？」

「鎖骨だぞ。そんな目の前までクラゲが寄って来たら誰でも気付くと思うけどなあ。」

「確かにそうだけど、刺されたときに潜ってなかったんじゃないか？」

「つまり潜る前って言いたいの？」

将幸も続弘の方を向く。

「ああ。それで海面で何かあったから気付かなくて……ってことも。」

「続弘は腕を組む。」

暫く、ただ砂浜を歩いている時間が過ぎた。すると将幸が何か思いついたのか、それまでうつむいていた顔をあげた。

「なあ、続弘。もしかしたらトリック解けちゃったかも知れない。」

余りの突然の発言に続弘はすぐに話が飲み込めない。

「は？つまり、その……どゆこと？」

将幸は構わず続ける。

「だけど、このトリックはありえない気がする。でもこれしか……。」

「おい、まったく話が分からないんだけど……。」  
「続弘はまだ理解できないようだった。」

「ちよつと伊藤さんたちのところに行ってくる。」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9948e/>

---

相棒探偵～2人の高校生～

2010年10月29日01時59分発行